ひとつの場所のために

For a little place

内藤 廣 Hiroshi NAITO

株式会社内藤廣建築設計事務所

はやいものであれから 10 年が経ちました。この間のことに思いを馳せると様々な事が脳裏に浮かんできます。衝撃的な被災の風景、それがダンプカーが走り回る騒がしい復興の風景に変わっていき、一段落するとともに、街は新たな生を静かに育もうとしています。

われわれのような外部の人間は、ひたすらお手伝いをすることしかできなかったわけですが、それが充分なものであったのか、あのやり方が適切なものであったのか、まったく自信がありません。この間、国や岩手県など 16 の委員会の委員を務めました。何を言っても聞いてもらえない。あの状況下ではしかたのないことです。ほとんどが負け戦でした。

防潮堤、高台移転、嵩上げと区画整理、これらの組み合わせで大方の復興がなされました。いわばドタバタのなかで現行法の枠組みの中で対応するしかなかったわけですが、もっと違ったやり方があったのではないかと思う事も一度ならずありました。法律や縦割り行政の壁に阻まれて突破できなかった事からは山のようにあります。

個人的には、こうした忸怩たる思いが復興祈念公園を作り上げる上でのエネルギーになっています。せめてあの場所は、被災された方たちも含めて多くの人が納得のいく場所に仕上がった。

わが国は災害が多発する国土を持っています。そう考えれば、平時に緊急事態への備えを議論して法整備をしておくべきだと思っています。今時のコロナ禍で議論されていることの多くは、3.11 の時に議論したこととさして変わりはありません。非常時の個人の権利の扱い方、人権の扱い方、共同体のあり方、どれも本質的には同じことです。非常時の対応が日常に戻る復元のあり方を変えるはずです。

これらが 10 年を経て日々頭をよぎることです。しかし、それでも 3.11 の被災地では数々の新たな営みが始まっています。それが豊かなものになることを願ってやみません。

さて、高田松原津波復興祈念公園は、復興の喧騒の中で計画され、その最終盤に建設されました。長さ 4km に伸びる高さ 12.5m の長大な防潮堤は、全ての計画の大前提のようなものです。千年に一度程度の L2 規模の津波は防

げないけれど、百年に一度程度の L1 規模の津波には対応できる、ということになっています。しかし、津波は震源や湾の地形で千変万化し、跳ね返されて生じる干渉波は予測不可能です。自然の振る舞いは基本的には計り知れないのです。それを忘れてはいけません。立派な防潮堤だけど、たぶん大丈夫だろう、くらいの感覚で受け止めておくのがよいのだと思います。したがって、全体計画では発災後の避難が前提になっています。どのように高台や山に逃げるができるのか、どのくらい時間がかかるのか、などを検証しながら園路を決め、建物も水没を前提に構造計算をしています。

広大な県営の公園の一部に設定された国営祈念公園の敷地は、防潮堤の背後の海の見えない低地にあります。嵩上げされた市街地からも、ほとんど海を見ることができません。この街を訪れた人は、美しい広田湾を見ないで街を通り過ぎることになります。海が遠くなったのです。

追悼祈念の場を作るに際して、やはりどうしても訪れた人たちに海を見てもらいたいと思いました。悲惨な出来事を引き起こした海は、日常的にはこの上なく美しい風景を提供してくれます。それを見ていただき、思いを馳せていただく、そして一時だけあの日を思い出していただく、そんな願いを託したのが防潮堤の上の小さな場所、「海を望む場」です。公園も展示施設も道の駅も震災遺構も、そうした道具立てのすべてはこの小さな場所のためにあるいつでもよいと思います。

遙か遠くの未来まで記憶を継承するために、市が大決断をして残すことになった震災遺構である旧気仙中学校、一本松、ユースホステル、道の駅だったタピック 45、さらに遠くの下宿定住促進住宅まで、2km もの長さになります。しかし、まだそれを見たくない地元の方もたくさんおられます。海に近寄れないという方もいます。津波の傷は深く、心の見えないところに無数に潜んでいます。

遺構を残すのであれば、これらを柔らかに包み込むようなものが是非とも必要だと思っていました。「大きな包摂線」を描き、これらを癒やすように大きなランドスケープでゆるやかに包み込むことを考えました。さらにこの包摂線に抱かれるように「小さな包摂線」を描いて、国立の追悼エ

リアになる当該敷地をさらに包み込むようにしました。

このふたつの包摂線で包み込まれた当該敷地の中央から広田湾の中心に向かう線を引くと、それは奇跡的に防潮堤とほぼ直角に交差することがわかったので、これを「祈り軸」としました。一方、隣接する遺構のタピックから、博物館機能を持つ伝承施設、人々の暮らしの場としての新しい道の駅へ、祈りの軸と直交する軸線を描くことが出来ます。被災、復興、そして未来へ、この軸線に意味付けをすることができます。これを「復興の軸」とし、「祈りの軸」と交叉する点を中心に、公園全体のゲートとなるような建物を配置しました。(口絵資料 図1-5)

この交叉部には水盤を設けて上部から光が射すようにし、ここで来場者が気持ちを切り替えられるようにしています。ここから防潮堤に向かう逆V字型の広場を作り、その中央正面に櫓の列植の塊を配置しました。ここが日常的な喧噪からしだいに離れて、気持ちを整えていく場所になっています。広場は緩やかな下り勾配になっていて、その先に献花をする場所があります。さらに進むと、少し上り勾配になって橋を渡ります。その先に階段があり「海を望む場」へと人を導いていきます。この300mの間に、これらの幾つもの違った空間体験が仕込まれています。帰り道、「海を望む場」から振り返ると、これらの構成が分かるようになっていきます。

建物はRC造で、一部鉄骨造です。RC造の小屋裏部分には、窓のない部屋を設けて万が一の場合に備えています。建物の主要な表情を形成している上部の白い外壁は、高い精度を出すためにPCaのカーテンウォールで構成し、RCの躯体から1mほど持ち出しています。アプローチ側のPCaには、追悼の気持ちを込めて18434個のちいさな孔があけられています。これは2018年時点での亡くなられた方と行方不明の方の数です。具体的に壁を眺めると、い

かに多くの方が亡くなられたか、数字の意味を実感することができます。夜になると内側の壁が点灯され、この孔からやさしい光が漏れ出し、建物からの密やかな哀悼の意を表しています。

多くの人が訪れ、道の駅と伝承施設に立ち寄り、ほとんどの人が300mほど離れた防潮堤の上のちいさな場所、海に対して思いを馳せる「海を望む場」に足を運んでくれます。公園全体はまだ未成熟です。今は二つの軸線が際立っていますが、やがて包摂線を構成する樹木や灌木が育っていき、より柔らかな場が広がっていくことを期待しています。

以上述べたことは、あくまでも計画上の構想の組み立て方です。防潮堤の可否も含めて、あの惨事に対してこの時代がどのように向き合ったのかを、公園全体で伝える場になったのではないかと考えています。

公園全体でメッセージを伝えるようにするには、諸官庁の協力が不可欠でしたし、なによりデザイン的な一貫性を実現するに際しては、平野勝也東北大准教授と篠沢健太工学院大学教授との共同作業がおおきな役割を果たしました。津波がご専門の首藤伸夫東北大名誉教授からは、貴重なアドバイスと精神的なご支援をいただきました。また、構想委員会の中井検裕委員長はもとより、基本構想検討会の涌井史郎委員長、発災時に東北地方整備局長として陣頭指揮を執られた徳山日出男元国交省事務次官、具体化するに当たっての推進力となった脇坂隆一元東北国営公園事務所長のご支援とご理解があったことを付記しておきたいと思います。

参考資料

- 1) 口絵資料 図1-1, 1-2, 1-3